

ヤングアダルト文学を取り入れた日本語授業を通し、 日本語で社会参加を目指す

山崎千恵子ハイネマン

日本語生教材として、また CBI クラスの一環としても同年代日本語母語話者に人気があるヤングアダルト文学の取り入れを提案する。ヤングアダルト文学はイラストの助けを借りながら物語の世界に入り込んでいく児童文学やマンガと違い、文字で表現された世界を読解力でのみ内容をイメージさせる役目がある。また一般文学と比べ平易な文章で描かれ、漢字も少なく、学習者と同年代の談話が多用され、現代の若者目線でのテーマが多く含まれている。さらに日本語の学習者にとってイメージするのに困難な擬声語、擬態語（秋本 2007 岩崎 2008）がマンガのように枠外でなく、文章中にあるためオノマトペを読み省かず、コンテキストより読む力をつけることになる。

日本語の学生が日本留学後、同年代の会話についていけなかったという感想を耳にするにつけ、教科書に出てくる会話でなく、日本語での同年代との社会参加を促す生教材の必要性を感じていた。これまでの Audio Approach → Communicative Approach をへて Social Network Approach（當作 2012）を誘発するに適する教材である。ヤングアダルト文学は純粋な原文の作品であり、同年代母語話者の支持を得ていることより、彼らの考え方がより多く反映されていて、学習者にとっても同年代の心情に触れるよい機会となる。本研究では、中村航の「リレキシヨ」を取り上げ、1) カタカナ表記によるプリクラ室内の自動音声分析、2) メタファーとオノマトペが多用されたアイロンがけ描写シーンの実演、3) 浪人生に書いた自己紹介文とラブレターから同年代による見知らぬ人への敬語表現、4) 18・19 歳の男子の一方的談話を読んで、相づちと返答を創作するといった授業内容を紹介する